

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21371

研究課題名(和文) 20世紀前半の中国における医学近代化の構造：蘇州国医医院の事例を基に

研究課題名(英文) The modernizing transformation of traditional medicine in early-twentieth century East Asia: the case of the Suzhou Hospital of National Medicine

研究代表者

村田 慶子(大道寺慶子) (MURATA [DAIDOJI], Keiko)

慶應義塾大学・文学部(三田)・講師(非常勤)

研究者番号：90725152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジアにおける医学の近代化の構造を明らかにすることを目指した。具体的には、日中戦争期の中国で開設された中国伝統医学の病院(蘇州国医医院)における医療の実践、20世紀初頭に欧米から興隆した全体論的医学medical holismが日本の医学に与えた影響(自家中毒・体質医学)について考察した。個々の事例を分析するにあたっては、医学の社会的役割と、臨床における理論と技術の再構築、疾病の社会的文化的表象という視点を重視した。こうしたアプローチを通して、近代過程における医学知のグローバルな伝播と、東アジアの人々の病経験や身体観とを結び付けるという目的を達成することができた。

研究成果の概要(英文)：Through three-year research of the modernizing process of medicine in East Asia in the social/cultural/political contexts, this project has succeeded to shed light on how medical transformation took place hand in hand with the changing view of the body and illness, and the role of doctor in society.

Firstly I made analysis of the social roles and clinical practices of the Suzhou Hospital of National Medicine (Suzhou guoyi yiyuan, 1939-1941) in Suzhou, China which was exclusively dedicated to provide the treatment based on reformed version of traditional Chinese medicine. Secondly I examined how the idea of 'autointoxication (jika-chudoku)', a Western explanation of intestinal microflora, was consequently fundamental to the creation of a new emotion-related disease in early-twentieth century Japan. Thirdly I elucidated how the theory of constitution (taishitsu) provided a conceptual framework for redefining health and illness in modern Japan.

研究分野：医学史

キーワード：中国医学 漢方 近代化 自家中毒 体質 身体観 生態学的疾病論 蘇州国医医院

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半から20世紀前半にかけての東アジアにおける伝統医学のヒストリオグラフィは、大きく3つの系統に分けることができる：第一は医学の実践者により、諸流派の理論体系の特徴や、その書誌的な発展過程を記述する。第二は、近代国家建設の一環として医療が制度化される過程から伝統医学の変遷をとらえようとする視点である。第三は伝統医学の内容に目を向け、理論や治療法の変容に、外来文化との交渉を読み取るアプローチである。

上記に加え、近年の医学史研究においては、医療を医療者・患者・疾病の三者により構成される複合領域とみなし、医療形成の場に文化、社会、行政、環境などの力学を読み取ろうとする手法が盛んである。本研究は、患者の身体観・病観という視点を軸に、近代化に伴う人々の疾病経験の変化と医療の形成がどのように相関していたかに焦点をあてた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀前半の東アジアにおける医学の近代化の構造を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

主に医師・患者・傷病の構図にどのような地域性・時代性・政治性が反映されているのかを分析した。

(1) 日中戦争期に中国の蘇州に開設された蘇州中国医学の大型病院・蘇州国医医院(1939-1941)における、入院・外来患者の治療記録の分析をとおして①病院の社会的役割および、②昭和前期の日本漢方医学が、同時期に同じく近代化を目指していた中国医学にどのような影響を与えたかを明らかにする。

(2) 「自家中毒」や「体質」といった19世紀後半の西欧医学から普及した科学知

識の概念が、同時代の日本人の身体観・疾病観の形成にどのような影響を与えたかを、医学説および社会的・文化的文脈から考察する。

4. 研究成果

(1) 蘇州国医医院の事例

蘇州国医医院の事例を基に、20世紀前半の中国における医学の近代化の構造を明らかにした。

まず当該医院の果たした社会的役割を明らかにするにあたり、蘇州国医医院の刊行物『蘇州国医医院院刊創刊号』（1939）に記載された、当該病院の入院・外来患者それぞれの治療記録を統計的に分析した。入院患者たちはどのような人々でどのくらいの期間、在院したのか、退院の際は、病気が治って退院したのか、未治のまま退院したのか入院患者の構造と治療記録から考察した。1939年4月17日の開院から同年9月30日までの入退院記録によれば、入院患者の総数は132名、うち男性114名（80.3%）女性18名（12.7%）である（図1）。彼等の転帰は全治が107名（81%）の他、退院後も治療を継続する者が19名、中国医学では治すことができないとして入院を拒否した患者が5名、死亡が1名である（図2）。さらにサンプルとして詳細な治療記録が残っている入院患者47名（男性42名、女性5名）に関しては、入院日数の平均は約14日間、平均年齢は約32.2歳であった。即ちこの病院は、働き盛りの男性が短期間で疾病を治療し、治癒して退院していく場であった。転帰については退院後に治療を継続する者もいたが全治が8割以上を占めており、少なくとも長期療養の場ではなかった。

民国期の中国医学は、西洋医学からの批判に対抗する形で、医論や組織を整備し近代化を志向していたが、それを達成する指標の一つが大型病院の設立であった。近代化した中国医学を具現化しようとした蘇州国医医院の活動は、例えば中国医学を主・西洋医学を

従として併用していた香港の東華医院（1872年—）とは対照的である。Sinnや帆刈の先行研究は、東華医院は病人の治療だけでなく、海外難民の救済、医院内および海外の異郷で死去した中国人の埋葬および棺の故郷への送還、災害救助など、香港を拠点とした海外ネットワークを展開し、民間慈善団体としての役割も大きかったと指摘する^①。蘇州国医医院の場合は、ほぼ治療に特化しており、その処方にも、以下に示すように新しい試みがなされている。

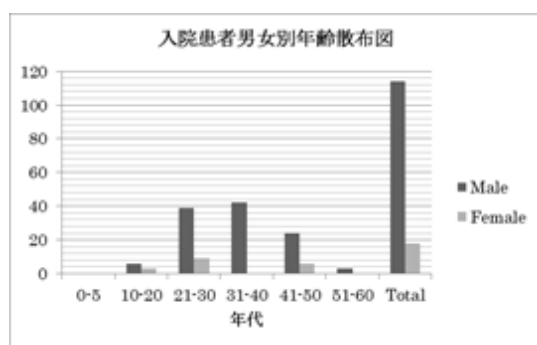


図1

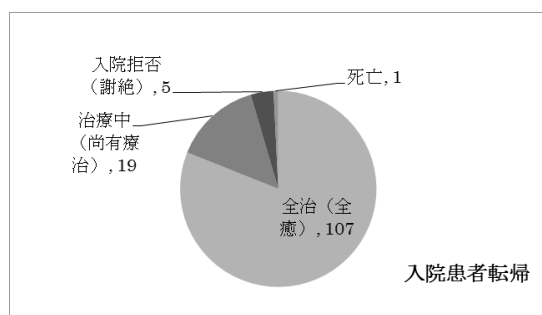


図2

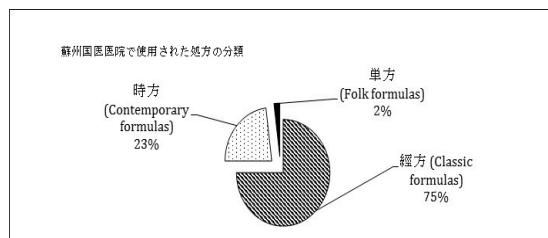


図3

(2)『傷寒論』日本漢方と中国医学

蘇州国医医院の治療記録から、当該医院と日本漢方の強い関連を示す2点が浮上する。

第一に、漢代の処方テキスト『傷寒論』に拠る処方を多く用いたこと（図3の「経方」が示す）。また、現代の中国医学の診断で用いられる重要概念「證（shō / zheng、英語ではpresentationとも訳される）」の原型は、民国期の中国において形成されたもので、それは20世紀前半の日本漢方の「證」の解釈に由来する可能性が高いことである。

日本漢方医と中国医学医の間の交流の記録を通して、日本漢方界が中国医学の近代化に与えた影響が指摘される。蘇州国医医院で働く医師の大半が蘇州・上海を中心とした中国医学改革派に属し、同時代の同じく近代化を目指す日本の漢方医たちと密に人的交流・知見の交換を行っていた。

昭和前期の日本漢方が『傷寒論』を重視したのは、科学医学との競合に起因する。日本漢方に対する抽象的かつ非実証的という批判に反論するため、漢方医達は、自らの臨床経験を基に『傷寒論』を独自に解釈し、抽象的な陰陽五行説を否定して、病の可視化・可触化を主張した江戸時代の医師・吉益東洞（1702—1773）の医説が漢方近代化の拠り所になると考えた。さらに東洞の医学の独自性を強調することにより、日本漢方の「近代性」だけでなく、中国や韓国との差異化をも目指した。蘇州国医医院設立当時、日本漢方は昭和前期における東亜共栄圏の政治的イデオロギーの拡散に伴い、日本漢方を中国大陸に紹介することに、自らの政治的・医学的意義を見出そうとしていた最中であった^②。

蘇州国医医院における『傷寒論』の重用および「證」の解釈から中国医学医と日本漢方界が、同業者として「伝統医学の近代化」に関する意識を共有していたことが読み取れる。日本との相違点としては、中国医学の古典の応用・再解釈に、中国のナショナリズム、ひいては反帝国反封建といった日本漢方界の意図とは異なる複数のイデオロギーが通低していた点を挙げることができる。

上記の考察により、蘇州国医医院の医療を
欧米、日本、中国の医療制度を取り入れたグ
ローバルな医学近代化の過程に位置づけた。

(3)現代の日本人の身体観・疾病観を理解す
るうえで核となる2つの概念を取り上げ、そ
れらの意義を医学および歴史の文脈におい
て分析した。

① 「自家中毒」

第一は「毒」の概念である。具体的には20
世紀初頭、免疫学の分野で提唱された「自家
中毒 (autointoxication、腸内腐敗菌を指す
と解される)」が、どのように日本で受容さ
れたかに着目した。西欧の解釈に従い、日本
の医学でも導入当初は、自家中毒は諸病の元
になる腸内腐敗菌として認識されていた。し
かし1930年代頃になると、日本の自家中毒は、
適応障害によって体内で起きる中毒症状、典
型的には頭痛・嘔吐の繰り返し等を呈する心
身症に近い症状を指すようになる。1970年代
頃まで小児科や精神科で一般的に使用され
ていた。特徴的なのは、自家中毒は、相対的
に都市の子供・知識階級の子供に多いとみな
された点である。そうした医学的・文化的な
表象の分析を通して、日本人が近代化に対す
る精神的反応の一つとして自家中毒を位置
づけたこと、その際、伝統医学の毒概念のリ
モデリングが行われたことを明らかにした。

②体質医学の形成

第二は「体質」の概念である。一般には「遺
伝的素因と環境要因との相互作用によって
形成される」個々人の特質と定義される。訳
語のconstitution等は古典西洋医学に遡る
が、日本で「体質」が一般的になったのは20
世紀に入ってからである。現代の日本人が日
常的に自らの心身の問題を理解する際に用
いるポピュラーな概念の一つであるにもか
かわらず、その成立過程も理解も、漠然として

いたが、当時の西欧で興隆した全体論医学
medial holismの影響を受けていた点を指摘
した。体質は人々の体力・性格・特定の病気
に罹患しやすい傾向などを総合的に表す語
として広く人口に膾炙した。

20世紀前半の日本における体質学は、大き
く3つの分野に分けることができる。第一は
生体観測や古人骨計測のデータなどに基
づく人類学の系譜で、とりわけ日本人種論の探
求と深く結びついた。第二は遺伝学や免疫学
などに基づく医学分野で、特に体型と人格と
発病（特に精神病を発症しやすい性格）に相
関性を見出そうとしたユング、クレッチマー
のような精神医学における研究がよく知ら
れている。第三は優生学で、第一と第二の分
野にまたがって日本人種の改良について特
に社会医学面で主張を行った。しかし第二次
世界大戦の敗戦と共に、日本における人類学
と優生学の分野における体質学は急速に衰
退した。

本研究は、20世紀前半の日本の医学におい
て、体質論が重要性を増していった過程をた
どるにあたり、肺結核に罹りやすい体質と考
えられた「腺病質」を取り上げ、体質概念が
病気の診断・治療・予防にどのように適用さ
れたかを考察した。結核の病そのものが遺伝
するわけではないが、上記のような体質は遺
伝性であり、結核菌を誘致する素地となる、
と論じられていた。さらに例えば暗く、湿っ
て密集して不衛生な環境は、こうした体質を
助長するものとされた。それは人間と環境・
遺伝の新しい関係性の構築であり、細菌学の
もつ還元主義への反動は、人体を生態学的・
社会学的な環境の中で読み取るアプローチ
を強調し、様々な代替医療の登場を促しただ
けでなく、正統な西洋医学にも採り入れられ
た。その表れの一つとして、体質医学を歴史
的に意義づける。また西欧との比較より、日
本の体質論は先天的な素因よりも後天的な
環境や個人の努力による「改善」を重視する

傾向があると論じた。

以上により本研究の目的である、近代過程における医学知のグローバルな伝播と、ローカルな人々の病経験や身体観とを結び付けた。

<参考文献>

- ① Elizabeth Sinn 1989, *Power and Charity*, New York: Oxford University Press, pp. 60-71。帆苅浩之『越境する身体の社会史—華僑ネットワークにおける慈善と医療』(2015年、風響社、東京)、第2、3、4章。
- ② 慎蒼健「日本漢方医学における自画像の形成と展開」、金森修編『昭和前期の科学思想史』(2011年、勁草書房、東京)所収、311—340頁。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. Daidoji, Keiko, The Formation of Constitutional (*Taishitsu*) Medicine in Early Twentieth-Century Japan: The Scrofulous Constitution (*Senbyōshitsu*) and Tuberculosis, *HISTORIA SCIENTIARUM*, Volume 27-2 (2018): 199-217 (査読有)。

2. Keiko Daidoji (First author) and Eric I. Karchmer, The Case of the Suzhou Hospital of National Medicine (1939-41): War, Medicine, and Eastern Civilization, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal* (2016) 10:1-23 (査読有)。

<http://easts.dukejournals.org/content/early/2016/10/24/18752160-3701876.full.pdf+html>

3. Book review Daidoji, Keiko “Sean Hsiang-lin Lei, *Neither Donkey nor Horse: Medicine in the Struggle over China’s Modernity*” (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2014), *Medical History*. 2016; 60(3): 425-427 (査読無)。

4. Daidoji, Keiko “The reconstruction of the Treatise on Cold Damage in eighteenth century Japan: text, society and readers”, *Asian Medicine-Tradition and Modernity* Volume 8 (2015): 1-33 (査読有)。

<http://europepmc.org/articles/PMC4712354>

5. 書評 大道寺慶子「武上真理子「科学の人・孫文—思想史的考察」」『科学史研究』第III期第54巻No.275 (2015年), 271—2頁 (査読無)。

[学会発表] (計6件)

1. Daidoji, Keiko “The Formation of Constitutional (*Taishitsu*) Medicine in Early Twentieth-Century Japan: The Debate on the Susceptibility to Tuberculosis” at The Workshop on History of Medicine in China and Japan, 2016.

2. 大道寺慶子「近代日本における体質医学の形成—結核の病因論を中心に」第117回日本医史学会学術大会、2016年。

3. Daidoji, Keiko “The Fear of Disease from Within: the Environmental Concerns in the Aetiology of Discovery from end Nineteenth to early Twentieth Century Japan”, at the 3rd International Health Organizations (IHOs): People, Politics and Practices in History Perspective (第三屆國際衛生組織史會議), 2016.

4. Daidoji, Keiko “ ‘Picky Eaters’ in

Modernizing Japan: the Effects of Improper Diet on Children's ill Health from the Eighteenth to Early Twentieth Century", AAS (Association for Asian Studies) 113th 2016 Annual Conference, 2016.

5. Daidoji, Keiko "Auto-intoxication: the Emergence of a Mysterious Emotion-related Disease in Early Twentieth-century Japan", at the conference "The History of Medicine in East Asia: China, Japan, and Korea", 2015. 招聘による

6. Daidoji, Keiko, "Auto-intoxication: toxin, disease and self in early twentieth century Japan", at the 14th International Conference on the History of Science in East Asia (EHES), 2015.

〔図書〕（計1件）

1. 赤江雄一編（大道寺慶子、島村奈津、山下範久、勝川俊雄、生源寺眞一、池上俊一、比嘉理麻、山本道子、勝川史憲、野口和行、小泉武夫）『食べる－生命の教養学12』（慶應義塾大学出版会、2017年7月）298頁、所収「東アジアの食餌－消化と健康」、187－215.

6. 研究組織

(1)研究代表者

村田（大道寺） 慶子（MURATA[DAIDOJI], Keiko)

慶應義塾大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：90725152

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()